第二部　新約学からのコメント

山　田　耕　太

1．はじめに

日本旧約聖書学会の会長である国際基督教大学の並木浩一大学院教授から新約学のキー・コンセプトである重要なテーマについてご講演を賜ったことに心から感謝の意を表したい。まず、メシアニズムというテーマについて個人的な感想から申し上げると、30年前の学生時代に読んだモーヴィンケルのイエス理解と極めて似たウィリアム・マンソン『メシヤ・イエス』(1)、「人の子」集団説を唱え、それに対してモーヴィンケルが「人の子」個人説の立場で批判したT.W.マンソン『宣教者イエス』(2)、G.ショーレムのエラノス講演「ユダヤ教におけるメシア的理念の理解のために」を含む『ユダヤ教の本質』(3) を思い出させる。また、よく準備された講演は大学院のセミナーを懐かしく思い起こさせ、4半世紀前の大学院生時代に戻ったかのような錯覚に陥る。ご多忙の中にもかかわらず、3月下旬とはいえ雪の舞う中、遠くから激励のために新発田にまで足を運んで下さり、久しぶりに心から満たされる恵みに浴させて頂いたことを改めて御礼申し上げたい。以下では、モーヴィンケルの著作を出発点として新約学からのコメントを簡単に付け加えさせて頂きたい。

2．モーヴィンケルの『来るべき者』の意義

モーヴィンケルの『来るべき者』は、メシアニズム研究に関してはJ.クラウスナーの著作(4) と並んで20世紀半ばの代表的な著作である。これは19世紀末から20世紀始めにJ.ヴァイス(5) とA.シュヴァイツアー(6) によってイエスや原始キリスト教の始まりにとって重要であったのは後期ユダヤ教の終末論や黙示思想である、という20世紀の新約学の潮流を決定づけた大きな流れの中にある。しかし、最近ではイエスの中心的な思想にキュニコス学派の影響を見て、終末論や黙示思想を見ない流れも生じてきている(7)。 新約聖書の「非神話化」ではなく、イエスの「非終末論化」の道である。だが、それと同時にイエスを終末の預言者として描くことも続けられている(8)。

モーヴィンケルの研究書の第一部「初期ユダヤ人（教？）の終末論における未来の王」は、旧約聖書学プロパーの領域で、一言で要約すると旧約聖書の「油注がれた者」（マーシアハ）というヘブライ語の38例の分

析に注がれている。そこでは、この言葉が始めは王や大祭司の即位に用いられ、後に王の即位の詩篇や預言書の中で将来の希望としてイスラエルを治めるダビデの家系の王について用いられたことが跡付けられる。この議論の展開が基本的には正しいことは既に他でも確認されている[9]。

さらに、「油注がれた者」という言葉がメシア称号となるのは、その後の黙示文学に基づくことが第二部「後期ユダヤ教のメシア」で展開される。第二部の主要な部分は、「王的メシア（「国家的メシア」は適訳か？）」に関する、主にソロモンの詩篇17編の分析（第９章）、「人の子」に関する第一エノク書（＝エチオピア語エノク書、エノクの黙示録）37－71章と第四エズラ書（＝エズラの黙示録）13章を中心とした分析（第10章）に割かれている。こうして新約聖書のメシアニズムの背景を探るのであるが、新約学にとって重要なのは新約聖書の直接的な背景となる旧約聖書偽典の黙示文学を取り扱った「人の子」に関する第10章である。

モーヴィンケルの研究書は1951年にノルウェー語のオリジナル版が出版され、1956年に英訳が出版されて広まったのであるが、今から50年前の著作であり、既に古典的である。とりわけ、その著作の時点ではまだ本格的に研究が着手されていない1948年に発見された死海文書に関する考察を欠いている。その後の死海文書の研究を視野に入れるならば、死海文書には「（ダビデの家系の）王的メシア」[10]と「（アロンの家系の）祭司的メシア」[11]の二つの概念が見られ、しばしば「アロンのメシアとイスラエルのメシア」と並んで称される[12]。そこで、第二部の最後の2章は、現代の視点で見れば「王的メシア」「祭司的メシア」「人の子」の3章に分けて議論されるべきであろう。また、「祭司的メシア」の章では死海文書ばかりではなく、「王的メシア」の章（第9章）で論じられている『十二部族の遺訓』「レビの遺訓」18章もそこで議論されるべきであろう。また死海文書に関する議論は、「アロン的祭司」メシア論とともにヘブライ書のキリスト論と密接に関係する「メルキゼデク的大祭司」メシア論[13]についても論じられることになろう。

また、モーヴィンケルは、「王的メシア」や「人の子」を論じるのに黙示文学のさまざまな個所を用いて理念型を描き出すが、現在では時代毎に区別して、文書毎に異なるメシア像が論じられる傾向がある。

その上、現在の新約学の大きな潮流は1950年代頃まで盛んに議論されていたメシアニズムなどに関する歴史的議論や様式史的研究にはなく、60、70年代の編集史的研究にもなく、80、90年代以降は社会学的研究や

修辞学的研究にある。そういうわけで、メシアニズムに関する最近の重要な著書は多くはなく、死海文書や旧約聖書偽典の個別の研究を除いて、筆者の知る限りではニューズナーらが編集した一冊の論文集しかない[14]。

また、旧約聖書偽典や死海文書のメシアニズムに関する最近の研究成果を含めた包括的な叙述は、辞書の項目以外に、ニュー・シューラーと称される19世紀末のE.シューラー『イエス時代のユダヤ人の歴史』シリーズの改訂版第二巻に詳細な文献表を含めてコンパクトで正確にまとめられているので参考になる[15]。

3．史的イエスと「人の子」の問題

モーヴィンケルの研究書で新約学の問題、とりわけ史的イエスの問題と最も密接に関係するのは、第10章「人の子」の議論である。しかし、現在の議論では、モーヴィンケルはその中の一人であるが19世紀末から1950年代頃の議論のように、イエスの「人の子」発言を全て史的イエスに帰し、イエスのメシア意識の自己表明として論じられているのではない。そうではなく、キリスト論が生じる極めて初期の段階として「人の子」メシア論が議論されてきたのであり、その一部が史的イエスにまで遡るか否かが議論されてきたのである。

「人の子」（ὁ υἱος τοῦ ἀνθρώπου）というギリシア語の言葉は、イエスが使用していたアラム語の「バル・(エ)ナーシュ」あるいは「バル・ナシャー」に遡る。その時代の広範なユダヤ教の文献に基づいて言語学的に分析すると、それは「（一般的な意味で）人間」「ある人」「（婉曲的な表現で話者を指す）私」という三つの意味で用いられていた。語義的なレベルでは、「人の子」という言葉そのものがメシア称号として用いられていなかった、という見解が広まっている[16]。　しかし、神学的レベルでは、ダニエル書7章13－14節の「人の子のような者」は明らかにメシアのイメージとして用いられており、それは第一エノク書の「喩えの章」と呼ばれる37－71章と第四エズラ書13章の「人の子」と表現されたメシア像に影響を与えたことが多くの研究で確かめられている。

新約聖書の福音書、とりわけマルコ福音書、マタイ福音書、ルカ福音書という共観福音書の中でイエスが用いる「人の子」という言葉は、どの程度の範囲でメシア称号として用いられているのか、またどの程度の言葉が史的イエスに遡るのか、という「人の子」の問題は、モーヴィンケル以降に議論が発展して、詳細に展開されている。新約聖書の「人の子」表現は、共観福音書に数多く見られるが、それは、以下の三種類の

言葉に分かれる。

（1）地上で現在働くイエスの言葉[17]

（2）十字架と復活に関する言葉[18]

（3）「人の子」メシアの到来（パルーシア）に関する言葉[19]

以上のように三つに分けられる「人の子」表現を全て史的イエスに帰す立場と[20]、その反対に全てを史的イエスではなく原始キリスト教団に帰する立場と[21]、その両極端の間の一部を史的イエスに帰する立場に分かれる。一部を史的イエスに帰す立場は大きく分けて、（1）を史的イエスに帰す立場[22]、（3）を史的イエスに帰すが、自分自身以外の第三者について語っているという立場[23]、（3）の中の「審判発言」（Q11:30、Q12:8、Q12:40、Q17:24、Q17:30）を史的イエスに帰す立場[24]、さらに最近ではパレスチナのタルグムやエルサレム・タルムードに見られる熟語的用法と同じ「人の子」の用法が見られる6箇所（Q7:34、Q9:58、Q11:30、Q12:8-9、Q12:10、マルコ2:10）は史的イエスに遡るという立場[25]などがある。

ここでは詳細に論じることができないが、第一に、（2）のイエスの受難と復活の予告とその変形に見られる「人の子」の表現は、十字架と復活という原始教団の宣教の言葉を表わしており、またダニエル書や第一エノク書などの「人の子」メシア論のイメージとは異なるイザヤ書53章に由来する「苦難の僕」メシア論とも重なる。これらは史的イエスに遡るものではなく、事後預言として語られていると考えるのが妥当である。この点ではかなりのコンセンサスが見られる。このような表現は、共観福音書の中で最も古いマルコ福音書では、14箇所の「人の子」表現の中で、8箇所に見られる。すなわち、マルコ福音書の「人の子」は十字架と復活の言葉として表現される傾向が見られる。それとは反対に、Q資料では、十字架も復活も直接的に言及されていないので、（2）の用法は一つも見られない。

第二に、（1）の地上的・現在的「人の子」の用法についてであるが、一般的に言ってマルコ福音書とQ資料のこの表現は、史的イエスに帰される傾向がある。その場合には「私」の婉曲的な用法として解されることが多い。

第三に、（3）の黙示的・将来的「人の子」の用法についてであるが、一般的に言ってマルコ福音書のこの表現はQ資料に比べて原始教団やマルコ福音書の編集者の神学的表現に帰される傾向がある。Q資料の用法は研究者によって異なるが、その一部分が史的イエスに帰すると考えら

れる場合がある。とりわけ、Q資料の研究者での取り扱いには幅がある。それは研究者がQ資料をどれだけ預言の言葉として見るか、あるいは知恵の言葉と見るかにかかっている。例えば、佐藤研[26]はQ資料を「預言書」と見て、「人の子」などを史的イエスに帰そうとする。反対にジェームズ・ロビンソン[27]はQ資料を「ロゴイ・ソフォーン」（知恵の言葉集）と見、それに従うクロッペンボルク[28]やバートン・マック[29]はQ資料の最古層Q1を知恵の言葉とし、預言や黙示的な言葉をQ2、Q3というQ資料の新しい層に帰そうとする。クロッペンボルクもマックもQ9:58のみをQ資料の最古層のQ1に帰すことは一致しているが、それ以外の「人の子」をクロッペンボルクはQ2に帰し、マックは最新層のQ3に帰しており、両者は一致していない。

以上のように、「人の子」の問題は、モーヴィンケルの研究よりも飛躍的に発展し、さらに詳細に展開されているのであるが、コンセンサスは得られていない、というのが現状である。

註

「メシアニズムの歴史的展開を問う」は第一回神学セミナーとして、2002年3月23日（土）13:00－15:00に敬和学園大学で開催された。出席者は並木浩一大学院教授の他に、本学の延原時行教授、永野茂洋教授、ならびに筆者の4人であった。本稿は筆者の口頭でのコメントに基づいているが、脚注の文献など詳細な点を大幅に書き加え、紙幅の関係で２点以外の口頭でのコメントを省略した。

(1) W.Manson, *Jesus the Messiah*, London: Hodder & Stoughton, 1943, (木下順治訳『メシア・イエス』日本基督教団出版局、1970年).
(2) T.W.Manson, *The Sayings of Jesus,* London: SCM, 1943, (木下順治訳『宣教者イエス』日本基督教団出版局、1972年).
(3) G.Scholem, *Judaica*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1963,（高尾利数訳『ユダヤ主義の本質』河出書房新社、1972年）.
(4) J.Klausner, *The Messianic Idea in Israel*, London: Allen & Unwin, 1956.
(5) J.Weiss, *Die Predigt Jesu vom Reich Gottes*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1892.
(6) A.Schweitzer, *Von Reimarus zu Wrede*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1906.
(7) E.g. J.D.Crossan, *The Histoical Jesus: The Life of a Mediterranean Jewish Peasant*, San Francisco: Harper, 1991.
(8) E.g. E.P.Sanders, *Jesus and Judaism*, Philadelphia: Fortress Press, 1995.
(9) E.g. F.Hesse, “chrio, ktl,” *TDNT* vol.9 (1974), 496-509.
(10) Cf.1QSb 5:20-8, CD7:20.
(11) Cf.CD 12:23-13:1, 14:19, 20:1.
(12) Cf. 1 QS9:10-11, CD12:22-23, 13:20-22, 14:18-19, 19:9-1, 19:34-20:1.
(13) Cf.11QMelch..

(14) J.Neusner, W.S.Green & E.Frerichs, *Judaism and Their Messias at the Turn of the Christian Era*, Cambridge: Cambridge Univ.Press, 1984.

(15) E.Schürer, *The History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ: A New English Version*, revised and edited by G.Vermes, F.Millar & M.Black, vol.2, Edinburgh: T.& T.Clark, 1979, 488-554.

(16) G.Vermes, "Appendix E: The Use of Bar Nash / Bar Nasha in Jewish Aramaic," M.Black, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts (Third Edition)*, Oxford: Clarendon Press, 1979 (1967), 310-328; idem, *Jesus the Jew*, Philadelphia: Fortress Press, 1981 (1973), 160-191; P.M.Casey, *Son of Man*, London: SPCK, 1979; B.Linders, *Jesus, Son of Man*, London: SPCK/Grand Rapids: Eerdmans, 1983.

(17) マルコ2:10（＝マタイ9:６、ルカ5:24)、2:28（＝マタイ12:8、ルカ6:5）; Q7:34（＝マタイ11:19)、9:58（＝マタイ8:20)、12:10（＝マタイ12:32); マタイ16:13; ルカ19:10。尚、Qの章節はルカ福音書の章節による。

(18) マルコ8:31、9:9（＝マタイ17:9)、9:12（マタイ17:12)、9:31（＝マタイ17:22、ルカ9:44)、10:33（＝マタイ22:18、ルカ18:31)、10:45（＝マタイ20:28)、14:21（２回。マタイ26:24、ルカ22:22)、14:41（＝マタイ26:45）; マタイ26:2; ルカ22:48、24:7。

(19) マルコ8:38（＝マタイ16:27、ルカ9:26)、13:26（＝マタイ24:30、ルカ21:27)、14:62（＝マタイ26:64、ルカ22:69）; Q6:22、11:30（マタイ12:40)、12:40（＝マタイ24:44)、17:24（＝マタイ24:27)、17:26（＝マタイ24:37)、17:30（マタイ24:39）; マタイ10:23、13:37、41、16:28、24:30、25:31; ルカ12:8、17:22、18:8、21:36。

(20) E.g. E.Stauffer, "Messiah oder Menschensohn?," *NovT* 1(1956), E.Bammel, "Erwägung zur Eschatologie Jesu," *Studia Evangelica* 3 (1964), 3-32, I.H.Marshall, "The Son of Man in Contemporary Debate," *EvQ* 42 (1970), 67-87.

(21) E.g.E.Käsemann, "Sätze heiligen Rechtes im Neuen Testament," *NTS* 1 (1954-55), 248-260; idem "Die Anfäng christlicher Theologie," *ZThK* 57 (1960), 162-185; idem, "Zum Thema urchristlichen Apokalyptik," *ZThK* 59 (1962), 257-284; Ph.Vielhauer, "Gottesreich und Menschensohn in der Verkündingung Jesu," W.Schneemelcher (ed.), *Festschrift für G.Dehn*, Neukirchen: Verlag der Buchhandlung des Erziehungsvereins Neukirchen, 1957, 51- 79; idem, "Jesus und der Menschensohn," *ZThK* 60 (1963), 133-177; H.Conzelmann, "Jesus Christus," *RGG III* (1959), 619-655, esp. 630-631; idem, *Grundriß der Theologie des Neuen Testaments*, München: Chr. Kaiser, 1976, 151-156;N.Perrin, *Rediscovering the Teaching of Jesus*, London: SCM Press, 1967, 173-199.

(22) E.g. E.Schweizer, "Der Menschensohn," *ZNW* 50 (1959), 185-209; idem, "The Son of Man," *JBL* 79 (1960), 119-129; idem, "The Son of Man Again," *NTS* 9 (1963), 256-261.

(23) E.g. R.Bultmann, *Theologie des Neuen Testaments* (6.Aufl), Tübingen: J.C.B.Mohr, 1968, 26-34.

(24) E.g. H.E.Tödt, *Der Menschensohn in der synoptischen Überlieferung*, Gütersloh:Mohn, 1959; F.Hahn, *Christologische Hoheitstitel*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1962; E.Jüngel, *Paulus und Jesus*, Tübingen:

J.C.B.Mohr, 1962; A.J.B.Higgins, *Jesus and the Son of Man*, London: Lutterworth Press/Philadelphia: Fortress Press, 1965.

(25) E.g. B.Linders, *Jesus, Son of Man.*

(26) M.Sato, *Q und Prophetie*, Tübingen: Mohr, 1988.

(27) J.M.Robinson, "LOGOI SOPHON: On the Gattung of Q," H.Koester & J.M.Robinson, *Trajectories through Early Christianity*, (加山久夫訳『初期キリスト教の思想的軌跡』新教出版社、1975年).

(28) J.S.Kloppenborg, *The Formation of Q*, Philadelphia: Fortress Press, 1987.

(29) B.Mack, *The Lost Gospel: The Book of Q and Christian Origins*, San Francisco: Harper Collins, 1993, (秦剛平訳『失われた福音書Q』青土社、1997年).